

習得と活用の関連を図る学習活動の研究

—指導と評価の工夫を通して—

教科教育室 水田 寿 中岡 容美
窪田 賢治 河野 美千代
重松 聖二 田中 善久

【要 約】

確かな学力を育成するために、授業改善を図ることが重要であるので、指導と評価の在り方を工夫し、習得と活用を関連させた学習活動について研究した。国語科、算数科、理科は、小学校を対象に、評価問題の作成・分析を行い、授業改善の方法を提案した。社会科、外国語科は、中学校を対象に、「活用」する学習活動や自己表現活動を通じた学習活動の工夫について提案し、その有効性を検討した。

【キーワード】 習得と活用 学習活動 評価問題 授業改善

1 研究の目的

児童生徒の「基礎的・基本的な知識・技能の習得」と「思考力・判断力・表現力等の育成」は、知識・技能を活用しながら課題を解決する過程において、習得と活用が相互に関連し合いながら図られるものである。そのためには、指導と評価の一体化を目指し、授業の質を高める授業改善が重要となってくる。

そこで、国語科、社会科、算数科、理科、外国語科では、児童生徒の実態に即した指導と評価の在り方の工夫を通して、習得と活用の関連を図る学習活動について研究することとした。

なお、国語科、算数科、理科は、平成23年度の研究成果を踏まえながら、小学校を対象に、独自に作成した評価問題の実施・分析を行い、その結果を基に、授業改善につながる学習活動を提案した。また、社会科、外国語科は、中学校を対象に、「活用」する学習活動や自己表現活動を通じた学習活動の工夫について提案し、授業実践を基にその有効性について検討した。

2 研究の内容

(1) 小学校における研究

ア 国語科の取組

(7) 今、必要とされている国語の能力

国語科では、「実生活で生きてはたらし、各教科等の学習の基本ともなる能力」を身に付けさせること、特に小学校においては「日常生活に必要な基礎的な国語の能力」を身に付けさせることが必要である。そのため、「話すこと・聞くこと」「書くこと」及び「読むこと」の各領域においては、継続的に、課題に応じて基礎

的・基本的な知識・技能を活用する活動を設定することが重要である。習得した知識・技能を活用することで、実生活に生きてはたらく力である思考力・判断力・表現力等が育成され、その力が更なる習得を促す。だからこそ、指導者は、目の前の子どもたちに適した、思考させ判断させ表現させるための活動を「活用」する学習活動として、意図的・計画的に仕掛けていかなければならない。

そこで、評価問題を実施することが、児童に知識・技能を活用する学びの機会を提供することになるとともに、教師にとっては、児童の習熟状況を正しく把握して課題を発見し、その課題に対応した学習活動を取り入れた授業を構築することにつながる手立てになると考え、小学校国語科評価問題を作成し、授業改善における有効性の検証を試みた。

(4) 評価問題の作成

作成に当たっては、全国学力・学習状況調査小学校国語Bの問題を参考にした。主に活用する力をみる国語Bの問題は、従来の国語の問題とは大きく傾向が異なる。テキストには、文章のほか表やグラフ、写真といった多様なものを用い、子どもの実生活に関連した場面と課題が設定されている。また、解答する際には、以下のような、習得した知識・技能を活用する児童個々の活動が求められる。

- ・複数の文章や情報を比較し、共通点や相違点を見付けること。
- ・複数の情報を結び付けること。
- ・意見の根拠となる表やグラフのデータを読み

取ること。

- ・立場を明確にして意見をまとめること。
- ・テキストを評価・批判しながら読むこと。

そこで、「読解力向上プログラム」に示された三つの重点目標を基に、全国学力・学習状況調査の問題傾向と調査結果に見られる課題を踏まえ、協力学校と研究員の先生方から児童の状況を聞き、小学校5年生を対象とした評価問題を作成した。

(d) 評価問題の実施結果と授業改善

協力学校で実施した評価問題を採点し、その結果を分析した。そして、授業で実施すべき学習活動を提案した。

次に、その事例を三つ紹介する。

a 事例1

話合いの場面において、資料から読み取ったことを根拠にした意見を、自分の立場を明確にして正しく伝えられるようにまとめることができるかどうかをみる問題を出題した。

正答の条件は下の3点である。

- ① 立場を明確にして書いていること。
- ② 資料のグラフから必要なデータを取り出して書いていること。
- ③ 指定された字数で書いていること。

結果は以下のとおりであった。

○ 正答率	33.4%
・立場を明らかにして書けていたもの	54.5%
・数値を根拠にしながら自分の考えをまとめていたもの	52.9%
・条件の字数で書けていたもの	82.1%

満点の答案数は3割以上あり、条件の字数で書けていたものも8割を超えていた。解答からは児童の書くことへの意欲を感じた。しかし、正答の条件①②のどちらか一方の条件は満たしているものの、両方の条件を満たしていない解答が多くあった。両者を比べると、②の、資料から正しい数値を取り出し、それを根拠として意見をまとめることへの反応率がやや低いことが分かった。

この結果から、「立場を明確にし、提示された資料から取り出した数値を根拠にして自分の考えを述べることに課題がある」と分析した。

そして、この課題からは、次のような学習活動を取り入れた授業改善を提案する。

- ・複数の情報を比較したり、既知の情報と関連させたりしながら、資料を解釈すること。
- ・資料から数値を引用し、それを理由・根拠にして意見をまとめること。
- ・意見に立場や意見の根拠を論理的に結び付け、発表したり書いたりすること。

b 事例2

スピーチ原稿に不足している情報をポスターの記載事項から取り出し、聞き手に正確に伝わるようにまとめることができるかどうかをみる問題を出題した。

正答の条件は下の3点である。

- ① 部活動の活動日時を書いていること。
- ② 部活動の活動場所を書いていること。
- ③ スピーチ原稿の形で書いていること。

結果は以下のとおりであった。

○ 正答率	42.0%
・伝えるべき内容を正しく捉え、資料から正しく取り出して書けていたもの	47.9%
・スピーチ原稿の形で書けていたもの	58.8%

正答は4割以上あった。しかし、正答の条件①②の伝えるべき内容を二つとも正しく捉えて書けていたものは、半数に達しなかった。また、スピーチ原稿の形をとって表現されていたものは、6割弱にとどまった。

この結果から、「必要な情報を正しく取り出し、目的に応じた異なる形態の表現に書き換えることに課題がある」と分析した。

そして、この課題からは、次のような学習活動を取り入れた授業改善を提案する。

- ・必要な情報を可不足なく取り出すこと。
- ・相手と目的を設定して、話すことや書くことによって伝えること。
- ・条件に応じて適切な表現形態で書くこと。

c 事例3

内容が同じで表現の異なる二つの文章を目的を持って読み比べ、両者の違いを明らかにし、表現方法とその効果について評価したことを文章にまとめることができるかどうかをみる問題を出題した。

正答の条件は次の2点である。

- ① 二つの文章を比べて読み、自分の考えの理由となる相違点を取り出してまとめて書いて

いること。

- ② 「理由は、」に続くように、60字以上80字以内で書いていること。
結果は以下のとおりであった。

○ 正答率	33.7%
・二つの文章の違いを捉えているもの	51.3%
・「理由は、」に続けて60字以上80字以内で書いているもの	53.9%

無解答率は低く、児童の文章には生き生きとした書きぶりのものが多かった。しかし、二つの文章の違いを的確に捉えられているものは5割ほどであった。二つの文章の内容は全く同じであるのに、「一方のほうが内容を詳しく書いている」などと読み取りを誤った解答も少なからずあった。また、「理由は、」に続く適切な表現で書けていないものが半数以上あった。

これらの結果から、「二つの文章の表現の違いを正しく読み取り、その表現効果について評価したことや自分の考えを理由を挙げて適切にまとめて書くことに課題がある」と分析した。

そして、この課題からは、次のような学習活動を取り入れることが必要ではないかと思われる。

- ・複数の文章や資料を、観点を設定して比べて読むこと。
- ・気付いたことや考えを簡潔に書くこと。
- ・クリティカルリーディングを意識して読み、表現の効果について考え話し合うこと。

(I) まとめと今後の課題

評価問題を実施し、児童一人一人の答案を見て結果を分析することによって、今どういうことに課題があるのか、どのような力を付ければよいのか、その力を付けるためにはどのような学習活動を設定すればよいか、ということを確認にしていけることができた。このことから、評価問題は、子どもの習熟状況を把握し、目的を明らかにした授業を構築するために有効な一つの手立てであるということを確認できた。

しかし、課題から必要と認められる学習活動を取り入れた授業を実際に行い、その効果を確認するまでには至っていない。今後は、授業の効果を分析することで、評価問題を活用することの意義や妥当性を、現場の声を聞きながら検証していきたいと考えている。

イ 算数科の取組

(7) 評価問題の結果分析と課題解決に向けての具体的な手立て

平成24年度の全国学力・学習状況調査において、算数Aの知識の問題と算数Bの活用の問題には、強い相関関係があるということが分かった。その中で、活用の力がある児童は知識の力もあるが、知識の力があっても活用の力があまりない児童のいることが指摘された。

そこで、全国学力・学習状況調査において課題があるとされている、数量関係の割合の内容に焦点を絞り、課題解決に向けての指導と評価の工夫について考えることとした。

昨年度、テープ図を用いた割合の評価問題を作成し、小学校4校（対象268名）で実施した結果、約4割の児童が「比べる量」と「もとにする量」を正確に捉えていない、という課題が明らかになった。

本年度は、児童がどこでつまづいているのかということ深く理解するために、昨年度の問題を改善した図1の評価問題を実施し、表1の結果を得た。

1 次の問題に答えましょう。

テープが3本あります。テープの長さは、次のようになっています。




- ・ 赤色のテープの長さは 4m 
- ・ 青色のテープの長さは 5m 
- ・ 黄色のテープの長さは 8m 

図1 評価問題の例

表1 評価問題の実施結果

問 題	正答率 (%)	主な誤答 ()内は%
(1)黄色のテープは赤色のテープの何倍か。	82.3	4 (3.8)
(2)赤色のテープは黄色のテープの何倍か。	69.2	2 (13.1)
(3)青色のテープは赤色のテープの何倍か。	67.2	0.8 (6.8)
(4)赤色のテープは青色のテープの何倍か。	65.5	1.25 (6.2)

これらの結果から、「比べる量」が「もとにする量」より小さい場合や、割合が整数ではなく、小数や分数である場合に正答率が低いことが分かった。

そこで、この問題の課題解決に向けて、三つの方法を提案した。

a 課題解決の方法1

「もとにする量」である赤いテープの長さを固定して、「比べる量」である白いテープの長

さを10m、6m、5m、4mと変えていくことにより、4mの場合も、割合が整数になる場合と同じ方法で解けることを児童に理解させる。

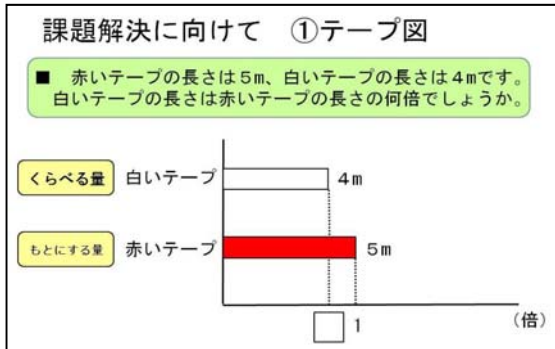


図2 テープ図を用いた指導例

b 課題解決の方法2

この方法は、図式化しているため、「もとにする量」から「比べる量」への対応が分かりやすい。0.8倍を表示し、「もとにする量」を求める場合や「比べる量」を求める場合も考えられる。児童に、これらは別々のものではなく、同一のものであるという認識を持たせることが大切である。

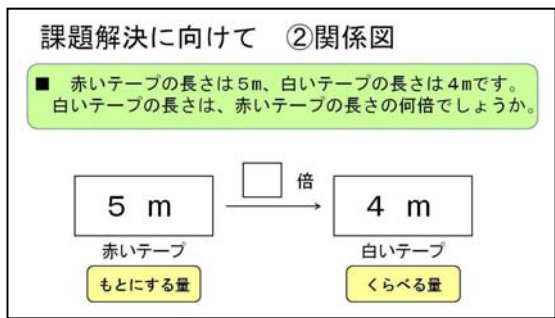


図3 関係図を用いた指導例

現場の先生からは、「三つの中でこの方法が一番児童にとって理解しやすいのではないかと」の感想を得た。また、□などを用いて式を作り、そこから求める方法もある。この考え方は中学校の方程式の考え方につながる。

c 課題解決の方法3

図4のように、公式や言葉の式だけでなく、

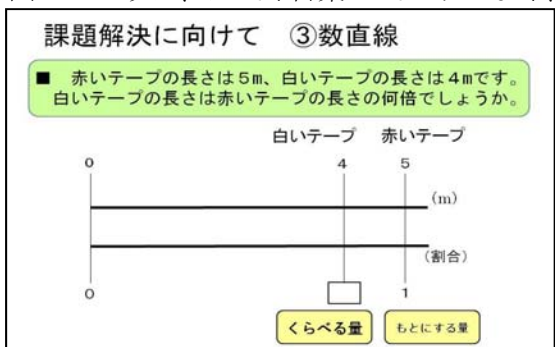


図4 数直線を用いた指導例

数量の関係が正しく捉えられるように、2本の数直線上に数量を表す活動は有効である。また、割合は1より大きくなるという誤った認識を持たせないためにも、数直線をかかせることは大切である。

評価問題を発展させ、活用の力を付けるために図5のようなワークシートを作成し、指導事例とともに提案した。現場の先生方の意見を参考にしながら改善していきたい。

図5 ワークシート例

(1) 活用する力を身に付ける評価事例案

図6は、「十分満足できる」状況と評価できる例である。0.5mは0.1mを単位として整数の計算に帰着して考え、0.1が5個集まっていることを自分で図に書いて表し、そこから式を用いて1mの値段を求めている。図と式や答えが結び付いていないものや説明がやや不十分であるものは、「おおむね満足できる」状況と評価できる。

図6 活用の力を見る評価事例

また、割る数と割られる数を間違えている場合は、「努力を要する」状況と評価する。この場合、児童に教師が、「なぜそうなるのか」「その金額は少なすぎないか」等の問い掛けをすることが大切である。

(1) 研究のまとめと今後の課題

活用の力を付けるためには、それまでに習得

した知識・技能との関連が大切である。割合に関連している学習内容を図7にまとめた。

この図から、5年生で割合の活用問題が解け、6年生の比や中学校での関数や資料の活用につなげていくためには、低学年からの系統立った指導が大切であるということが確認できる。

また、活用の問題につまずいたら知識の問題に戻ることも大切であるが、知識の問題から活用の問題へ発展させることも、活用の力を身に付けるためには大切であるということが、本研究を通して明らかになった。

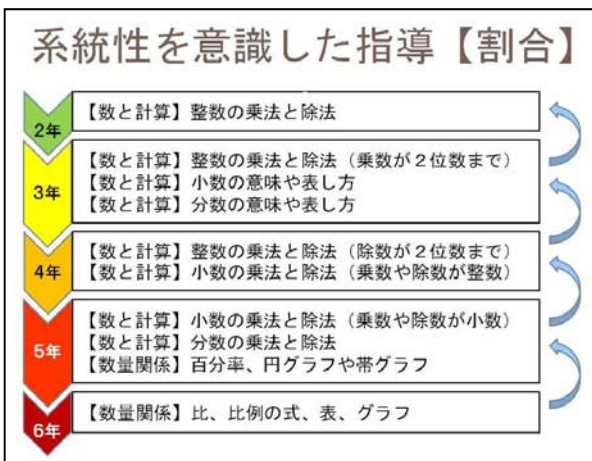


図7 割合に関する学習内容

基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得とそれらを活用するための思考力・判断力・表現力等の育成とともに、割合の有用性を実感させる。そして、日々の授業の中で既習内容を適切に活用し、課題を解決していくことができるように、習得と活用をスパイラル的に関連付けた学習へと高め、つなげていくことが、毎日の学習において重要である。

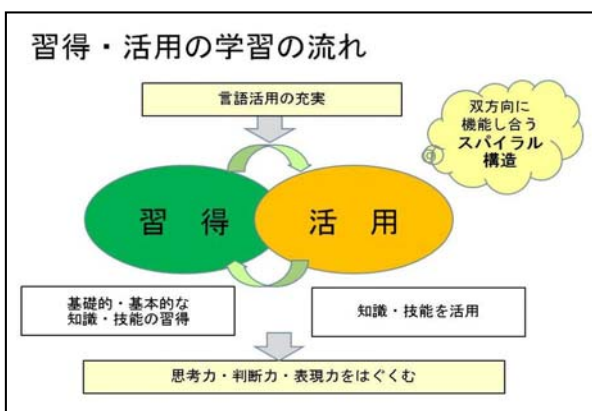


図8 習得と活用のスパイラル構造

今回の研究を生かし、現場の先生方の学習活動の支援ができるように、今後とも研究を重ねていきたい。

ウ 理科の取組

全国学力・学習状況調査における理科の問題には、観察、実験を盛り込んだ知識・活用を一体的に問う形式のものが多く、「活用」に関する問題が全出題数の約70%を占め、その正答率は約58%と低い。中でも記述式の問題の正答率は約35%と更に低くなっている。そのような調査結果は、児童の学力の状況を把握するためだけでなく、授業改善を行うための資料になる。

そこで、平成23年度に引き続き、小学校5年生を対象にした評価問題を独自に作成し、その結果の分析を基に、学習内容の理解を深めるための授業改善の方法を提案するとともに、学校現場の協力を得て、効果的な指導の方法についても検討した。

(7) 評価問題の作成と分析

評価問題を、小学校5年生 177名を対象に単元末に実施した。児童が苦手とする記述式の問題を中心に出题したために、難度の高い問題に思えたようである。特にエネルギー領域で、無解答率が高かった。しかし、自分の言葉で説明しようと努力した跡が感じられるものや、理解はできているのに、説明不足のために誤答となったものが多数あった。そこで、単元末に評価問題を解いた後、児童自らがつまづきに気付くような主体的な学習活動を提案した。

表2 評価問題の領域別分析

領域	エネルギー	生命	地球	平均
問題数	6問	23問	5問	
正答率(%)	44.2	60.2	41.9	54.7
無解答率(%)	12.9	8.4	7.7	9.1

表3 評価問題の出題形式別分析

出題形式	選択式	記述式
問題数	11問	23問
正答率(%)	55.3	54.4
無解答率(%)	5.7	10.7

(1) 課題が見られた主な設問と分析

a 振り子の運動に関する評価問題

振り子の運動での学習のねらいは、条件制限の考え方をを用いて実験し、「振り子が1往復する時間は振り子の長さのみによって決まる」ということを理解することにある。それに関する評価問題は昨年度に検討し、紀要等で提案している。今年度は、振り子の運動の規則性を理解した上での「活用」に関する学習活動として、

単元末に実施する評価問題を提案した。図9のような、糸の長さ、おもりの重さ、振れ幅がいずれも同じである振り子において、おもりの形だけを変えたとき1往復する時間はどうかを問い掛けた。児童に振り子の長さを正しく理解させ、振り子の運動に関する理解を更に深めさせることをねらい、作成した。

正答率は約7%と低く、「糸の長さとおもりの重さと振れ幅が同じだから、振り子が1往復する時間は同じ」と、振り子の運動の規則性は理解しているが、振り子の長さを正しく理解できていない児童が約60%、「おもりが重いから〇〇さんの振り子の方が1往復する時間が長い」などと、問題文の言葉を理解できていない児童が約15%いた。無解答率は約8%であった。

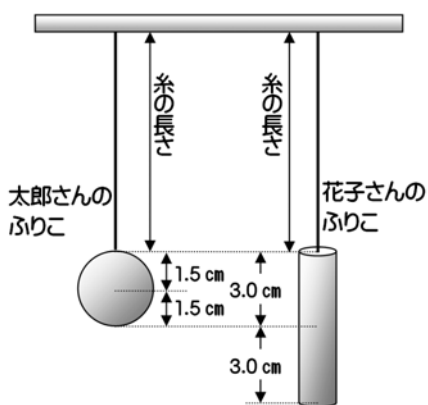


図9 振り子の長さに関する評価問題

規則性は理解しているが、振り子の長さを正しく理解できていない児童が約60%、「おもりが重いから〇〇さんの振り子の方が1往復する時間が長い」などと、問題文の言葉を理解できていない児童が約15%いた。無解答率は約8%であった。

b 電流の働きに関する評価問題

図10のような電磁石で、電磁石と棒磁石との間に引力が働くことを確認した後、乾電池の+極と-極をつなぎ換えると、電磁石のN極とS極が入れ替わり、電磁石と棒磁石との間に反発する力が働くことに気付けさせ、解答させる。

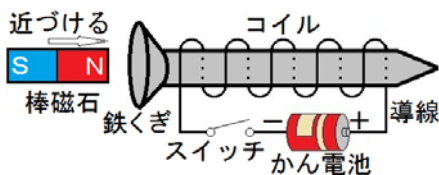


図10 電磁石の磁極の入れ替わりに関する評価問題

正答率は約31%と低く、説明が不十分である解答が約33%、乾電池の+極と-極、電磁石のN極とS極が混同した説明になっている解答が約8%あった。無解答率も約19%あった。

(ウ) 評価問題を活用した学習活動

評価問題を解くときにつまずいたところを、児童自らが気付くよう、問題と同じ内容の実験を行うことを提案した。そうすることで、実験の目的が明確となり、自らの仮説を検証してい

きながら、主体的に実験に取り組むことができる。そして、実感を伴った理解を促すことができると考える。また、実験の過程で、説明や記述の場面を設定することも大切である。

具体的に、振り子の長さに関する評価問題の検証実験では、まず、図11のように、長さ30.0 cmの糸を2本用意し、一方の糸には単一乾電池を横向きに、もう一方の糸には縦向きに取り付け、二つの振り子を作る。10往復する時間をそれぞれ計測すると、乾電池を縦向きに取り付けた振り子のほうが、10往復する時間が長いことを確かめることができた(表4)。

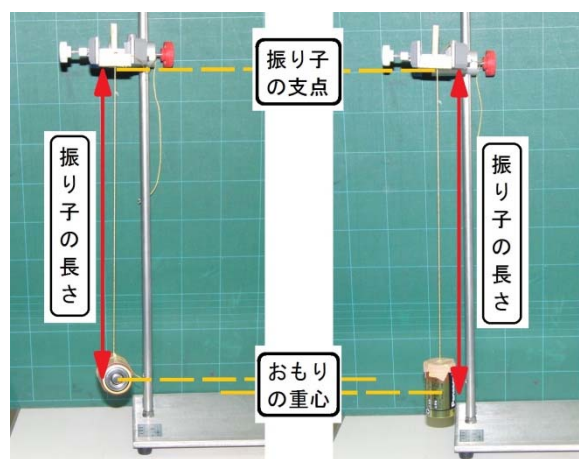


図11 評価問題の検証実験

表4 検証実験の結果

	振り子の長さ	10往復する時間
太郎さんの振り子	31.5cm	11.33秒
花子さんの振り子	33.0cm	11.80秒

電磁石の磁極の入れ替わりに関する評価問題についての検証実験でも、実感を伴った理解を促す効果が同様に期待できる。

(エ) 研究のまとめと今後の課題

評価問題に取り組んだ後、その問題と同じ内容の実験を行うことで、児童が実感を伴って質問の内容を理解でき、効果的な指導の方法となり得ることが確認できた。

また、学校現場の先生方と評価問題を活用した学習活動について検討したところ、効果的な評価問題の作成には、問い方の工夫や明確な出題の意図等が必要であることを再認識できた。また、児童の読解力を育てる指導も大切であることが分かった。評価問題を活用した学習活動を児童に還元するために、今後も学校現場との連携を図り、研究を深めていきたい。

(2) 中学校における研究

ア 社会科（地理的分野）の取組

中学校社会科地理的分野では、今回の学習指導要領の改訂により、基礎的・基本的な知識、概念や技能の習得を重視する観点から、世界と日本の諸地域の地域的特色について学ぶ地誌的な学習の充実が図られた。また、言語活動の充実の観点から、「地図の読図や作図などの学習を通して思考力や表現力等の育成を図るとともに、世界の様々な地域の調査や身近な地域の調査において、地図を有効に活用して事象を説明したり、自分の解釈を加えて論述したり、意見交換したりするなどの学習活動」を充実させることとなった。

そこで、社会科の取組として、地理的分野の地誌的な学習における「活用」する学習活動の工夫について提案し、授業実践を通して、有効性について検討することとした。

(7) 「活用」する学習活動の工夫

a 地理的分野における「活用」する学習活動の考え方

地理的分野の「活用」する学習活動とは、言語活動の充実の観点から考えると、「地図を有効に活用して事象を説明したり、自分の解釈を加えて論述したり、意見交換したりするなどの学習活動」であると捉えることができる。

読図や作図といった地図の活用に関する技能は、地理的技能の重要な柱であり、地理的な見方や考え方を習得する上で必要な技能である。また、地図を活用して事象を説明する学習活動は、地理ならではの言語活動であるとともに、地図に地域的特色を可視化してまとめるためには、地理的事象を空間的に関連付けたり、自分の解釈を加えたり、再構成したりするという、思考し、判断することが求められる。つまり、地図を効果的に活用する作業学習を取り入れることが、地理的分野における「活用」する学習活動につながると考えた。

そこで、「日本の諸地域」の学習において、地理的な見方や考え方、地理的技能の習得と、思考力・判断力・表現力等の育成を図るための「活用」する学習活動の工夫として、白地図に地域的特色をまとめる学習活動を提案した。

地理的技能として、「地理情報の活用に関する技能」と「地図の活用に関する技能」の二つ

が学習指導要領解説に示されている。今回の研究では、適切に地図化し、地図を使って説明する「地図の活用に関する技能」の習得をねらいとして、白地図を使うこととした。

b 白地図を使った学習のまとめ

「日本の諸地域」（第2学年）で実践した理由は、「世界の諸地域」（第1学年）での学習を通して習得した地理的な見方や考え方、地理的技能を活用することができること、また、白地図に地域的特色をまとめる学習活動を繰り返すことで、地理的技能の習熟の程度を段階的に高めることができること、さらに、探究型学習の「身近な地域の調査」の学習へとつなぐことができると思ったからである。

研究の内容として、まず、ワークシートを作成した。協力学校の先生方の意見を参考に、地域的特色を白地図にまとめるだけでなく、自分の言葉でもまとめられるようにした（図12）。

なお、地域区分は、教科書の地域区分を基にした。また、作成したワークシートは、本教育センターのホームページに掲載する。

次に、中国・四国地方、近畿地方及び中部地方の学習で授業実践し、提案した学習活動の有効性について検討した。

図13・14は生徒がまとめた地図である。

実践した先生方から、「白地図にまとめることで、地域を全体として



図12 ワークシートの例1

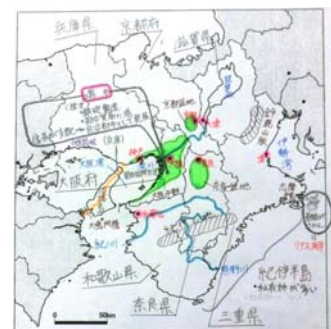


図13 白地図のまとめの例1



図14 白地図のまとめの例2

捉えることができ、有効である」「レポートより、一人一人の理解の度合いを把握しやすい」「地図化はできているが言葉ではうまく表現できていない生徒、逆に、言葉ではまとめられるが地図にうまく表現できない生徒を把握しやすい」など、提案した学習活動の有効性を評価する意見を得た。

さらに、近畿地方と中部地方の学習では、白地図を使った振り返り用ワークシートを用い、毎時間、学習の振り返りも行った(図15)。

白地図を使った効果として、「自分の地図を見ることで前時の学習の確認ができ、本時の学

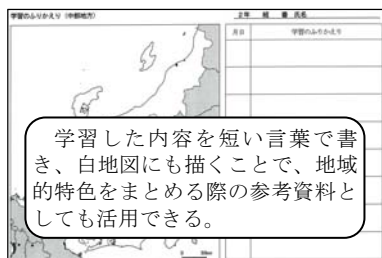


図15 ワークシートの例2

習に入りやすい」「理解の不十分な生徒などの把握につながり、個別に補足説明を行うことで理解を促すことができるなど、事後指導に生かすことができる」という意見を得た。

白地図を活用した学習活動は、作業時間の確保が課題として挙げられるが、学習活動を継続することで地図化する技能などが高まり、短時間での作業が可能になってくる。

(4) 学習評価でのワークシートの活用

ワークシートは、地図として表現されたものだけでなく、地図化するために思考、判断した過程などを見取することもできるので、「資料活用」の技能や「社会的な思考・判断・表現」などを評価する資料として活用できる。

「技能」の観点から、適切に地図化する技能を身に付けているかを評価する場合、「日本の諸地域」の前半の適切な単元で評価場面を設定することにより、事後の単元で地理的技能的習熟の程度を高める指導に生かすことができる。

「思考・判断・表現」の観点では、後半の適切な単元で評価することにより、地理的な見方や考え方、地理的技能的習熟の程度を見取り、個に応じた指導や支援に生かすことができる。

(5) まとめと今後の課題

白地図を使う「活用」する学習活動は有効であり、「書いて考える力」の育成につながる。今後は、今回検討が不十分であった評価の在り方についても取り組みたい。

イ 外国語科の取組

中学校外国語科では、現行学習指導要領の目標に、「聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う」とある。前回の学習指導要領においては、「聞くこと、話すこと」の2技能に焦点が当てられていたが、今回の改定によって、4技能全体においてバランスのとれたコミュニケーション能力の基礎を養うことが求められている。

小学校では、音声を中心に活動するため、文字の学習は中学校で始まることになり、各教科書で、書くことにおける自己表現活動が行われるようになっている。

そこで、協力学校に、教科書の自己表現活動における指導の工夫に取り組んでいただくとともに、生徒の作品を分析し、知識・技能の習得と活用の関連を図る指導と評価の工夫について研究することとした。

(7) アンケート結果

協力学校の中学2年生388名を対象にアンケートを実施した。

- 1 中学校の英語の授業をほとんど分かっていると答えた生徒は約12%いたが、ほとんど分かっていないと答えた生徒も約13%いた。
- 2 英語がやや苦手、とても苦手と答えた生徒が、合わせて約69%である。苦手と感じるようになった時期として、最も多かったのが中学2年の始め頃、続いて中学1年の後半、中学1年の始め頃であった。また、最も英語学習のやる気が高いのは中学1年の始め頃でもあるので、小学校外国語活動との連携と中学校入学時の指導が重要である。
- 3 家庭での予習・復習に掛ける時間は、15分～30分が最も多く、約60%であった。予習では、単語・熟語の意味を調べたり、本文を写したりすることが多く、他には、単語練習、問題集等を解くこと、文法学習等があった。復習では、予習に比べて、本文を訳すことや音読をすることが増え、他には、問題集・プリント等を解くこと、単語練習が多かった。
- 4 英語で書くことがあまり好きでない、全く好きでないと答えた生徒が、合わせて約56%いた。しかし、英語で文章や本を読むことにおいては、合わせて約65%になり、最も割合が大きかった。

5 英語の文を書くのが難しいということが、とても当てはまる、まあ当てはまると答えた生徒は、合わせて約69%であり、文法が難しいということがとても当てはまる、まあ当てはまると答えた生徒の割合に次いで2位であった。また、英語を話すこと、英語を聞きとることについては、とても当てはまる、まあ当てはまると答えた生徒の割合が、それぞれ約55%、約62%と、あまり低くなかった。

(4) 指導事例

協力学校において、書く力を伸ばすために次のような指導を実施した。

- 1 単語テスト
- 2 速記・ペアリーディング練習
- 3 訂正ノートの活用

よかった点

- ・単語テスト、速記・ペアリーディング練習を通して、基礎・基本の定着を図ることができた。
- ・訂正ノートに取り組むことで、自分ができなかったところを確認させ、次に向けての学習目標を持たせることができた。

今後の課題

- ・継続して実施すること。
- ・一人一人の達成状況をしっかり見取ること。
- ・次回のテストに生かせるように言葉掛けを行い、目的をしっかりと理解させること。

4 ワークシート「英語の仕組み」

ワークシート「英語の仕組み」を用いて英語の語順、主語、動詞、その他の品詞について説明し、文の仕組みを理解させ、簡単な内容の英文を書く練習をさせた。その指導によって、多くの生徒が順序よく英文を書くことができるようになった。

5 自己表現活動

「My Project 5 将来の夢を語ろう」は、プロゴルファーの石川遼選手が小学校6年生の時に書いた将来の夢の作文を基にした、英作文を書くための題材である。

英作文を書かせるまでのプロセスを段階的に指導した後、ワークシートを使って英作文を書かせた。

テーマが将来の夢ではあるが、まだ将来の夢や展望が描けていない生徒や迷っている生徒がいることを想定して、ある一定の条件を与えて

書かせた。今回は「もし100万円があったら」「もし魔法が使えたら」というものであった。このような条件を与えることで、生徒はかえって自由に英文を書くことができた。

(7) 自己表現活動の分析

中学2年生66名が書いた英作文を分析した。

- 1 語数、文の数
 - (1) 平均語数 42.9語
 - (2) 平均文の数 5.2文
- 2 用いられている主な文構造等

今回の自己表現活動が、将来の夢を語る内容であったため、未来を表現するwill、自分が将来したいことを表現するための不定詞の名詞的用法、その理由を表現するためのbecause節、目的を表現するための不定詞の副詞的用法が多く使用されていた。

3 主な間違い

単語のつづりの間違い、主語の欠落、動詞の欠落、動詞の誤用、形容詞の誤用等が多く見られた。

(8) 評価について

今回の自己表現活動では、次のような評価基準が考えられる。

1 構成

今回の自己表現活動では、マッピングを活用し、モデルとなる例と同じ構成になるように作成させている。そのため、モデルとなる例と同じ構成になっているか。

2 語数

今回は50語程度の語数で作成するように求められているので、その語数を満たしているか。

3 内容

理解できる英語を用いて、将来の夢を伝えることができるか。

(9) まとめと今後の課題

- 1 単語のつづり、主語と動詞を中心とした文構造の正確な理解のために、4技能を関連させた活動を継続して行う。
- 2 まとまりのある英文を書くために、文の構成について理解させ、常に意識させながら書かせる。
- 3 自己表現活動を実施する度に、生徒の作品に見られる主な間違いを整理し、生徒が自分で英文をチェックし、正確な英文が書けるようにフィードバックする必要がある。

3 研究のまとめと今後の課題

国語科、算数科、理科の取組では、小学校5年生を対象に、評価問題の作成・分析を行った。その分析から、評価問題は、児童の学習状況を把握し、学習の目的を明らかにした授業を構築するための一つの有効な手段となることが分かった。そして、評価問題に出題された内容について、一層の理解を促すための、具体的な教材や学習活動を提案することができた。今後は、その授業の効果を測り、そこから更に現場の声を生かした評価問題の作成や、授業改善の方法を検討していきたい。

社会科、外国語科の取組では、教科の特性を生かした学習活動の工夫を行い、評価を基に次の指導につなげていくことが、確かな学力を育成するために有効であることが分かった。

今後は、評価の在り方を一層工夫しながら指導と評価の一体化を推し進め、学校現場と協力して授業改善の方法を検討していきたい。

主な参考文献

- 文部科学省 『小学校学習指導要領解説』 2008
- 文部科学省 『中学校学習指導要領解説』 2008
- 国立教育政策研究所 『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料』 2011
- 国立教育政策研究所 「全国学力・学習状況調査結果」 <http://www.nier.go.jp/kaihatsu/zenkokugakuryoku.html> (参照2012. 10. 18)
- 国立教育政策研究所 『全国学力・学習状況調査の4年間の調査結果から今後の取組が期待される内容のまとめ～児童生徒への学習指導の改善・充実に向けて～(小学校編)』 教育出版 2012
- 横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校編 『習得・活用・探究の授業をつくる PISA型「読解力」を核としたカリキュラム・マネジメント』 三省堂 2008
- 文部科学省 『小学校理科の観察、実験の手引』 2011
- 文部科学省 『言語活動の充実に関する指導事例集～思考力、判断力、表現力等の育成に向けて～【中学校版】』 2011
- 濱野 清 「『言語活動の充実に関する指

導事例集』について 『中等教育資料 平成24年8月号』 2012

- 国立教育政策研究所 『特定の課題に関する調査(英語:「書くこと」)調査結果(中学校)』 2012